



TITLE:

<大會抄録>唐儀鳳三年度支奏抄・
四年金部旨符補考

AUTHOR(S):

大津, 透

CITATION:

大津, 透. <大會抄録>唐儀鳳三年度支奏抄・四年金部旨符補考. 東洋史研究 1989, 48(3): 598-599

ISSUE DATE:

1989-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154285>

RIGHT:

大會抄錄

北朝隋唐時代における胡族の漢化

——元氏を中心として——

長 部 悦 弘

四三九年に北涼を滅ぼし、華北を統一した北魏の軍事力の擔い手であった鮮卑族（以下、胡族と呼ぶ）は、周知の如く五世紀末に孝文帝が漢化政策を敢行したのを境に、漢文化を本格的に受容し始め、唐代には元行沖・元稹など漢文化の精華を吸収し、更に自身の作品を漢文化の中に刻印する文人すら産み出すに至った。

胡族の漢文化受容は、北魏孝文帝時代から唐代にかけて一直線に進んだのではなく、洛陽遷都後、北方の六鎮に留まり漢化に取り残された胡族が北魏末年の動亂の中から崛起し樹立した東魏・北齊では文化上、孝文帝により使用が禁止された鮮卑語を復活させるなど、鮮卑化とも言うべき様相を呈し、唐代にみられる胡族の完全とも言える漢文化受容、つまり漢化に至るまで紆餘曲折を経たのだが、これまで胡族の漢化については研究が孝文帝時代に集中し、それ以降の漢化については論及がなされなかった。加えて、孝文帝の漢化政策に研究の主眼が置かれていたがために、現實に漢文化の受容が進行したと推定される、日常生活の次元に眼を向けて、漢文化受容の過程、その結果成立した文化教育上の構造が今のところ明らかとなっていない。そこで、今回は時代を北朝から隋唐時代に設定

して、この問題を考えることとする。尙、胡族と漢族の通婚關係の進展を先ず手がかりに、考察を進めたい。

唐儀鳳三年度支奏抄・四年金部旨符補考

大 津 透

報告者はすでに「唐律令國家の豫算について」（『史學雜誌』九五—一二）、「大谷探險隊アンペラ文書群の復原」（『東洋史苑』二八、榎本淳一氏と共同執筆）において、大谷文書中のアンペラ痕をもつ文書群と、中國側發掘のアスターナ²³⁰號墓出土の文書を接續・復原し、表記の内容の一連の文書であることを示し、文書の性格と内容について簡単な解説を附した。その後武漢大學の陳國燦氏よりアスターナ²³⁵號墓出土の二點の文書がこの文書と一連であることを示された。

本報告では、新たに復原される部分の釋文ならびにその内容を簡単に解説し、あわせてそこから知られるようになった唐律令國家財政の特色の一端について考察を加えたい。本文書全體を見渡すと、軍事關係の財政指示が多く、このことは國家財政全體の傾向にある程度反映している。一つは牧監に關するもので、從來知られていなかった牧監關係の料物の流れがわかり、財政的に秦州が重要な位置を占めている。もう一つ、軍物の西域の軍事前線への送納に關する規定も多く、邊軍での和糴の財源として、諸州の庸調が秦州や涼州へ送納されている。唐の大帝國の軍事行動がいかに支えられていた

かがわかり、また七世紀後半の儀鳳年間においては西方の防衛にかなり比重がおかれていたこと、それを支えたのが毎年の度支奏抄であったことが推測できる。

中國合作運動の創始と初期活動

菊池 一 隆

合作社は中國近現代の政治、經濟、社會、教育諸側面において極めて重要な役割を擔ってきた。にもかかわらず、僅かな研究も一九三〇年、四〇年代に集中し、五・四運動前後から二〇年代はほとんど未開拓のまま残されている。本発表では、こうした研究現状の打開のために、中國ではいつから合作社が始まったのか、五・四運動との關連はどうか、いかなる推移を辿ったのか等について、一九一八、一九年から二四年までに焦點を絞りたい。すなわち、この數年間は、五・四運動にも啓發され、各種社會主義思想の一つとして、海外思想たる協同組合思想が「救國」の社會改造思想として目的意識をもって上海、北京の知識人、學生に受容され、宣傳され、かつ實際に信用、消費、生産の各種合作社が組織された時期である。彼らは協同組合理論を研究するとともに、一般に考えられている以上に、ドイツ、イギリス、フランス等々の各國協同組合の現状、歴史、および國際協同組合同盟の主張にも通じ、そこから多くのことを學ぼうとした。しかし、協同組合思想を「危険思想」とみなす軍閥の彈壓や江浙戰爭もあり、二四年には組織された合作社のほとん

どが姿を消してしまうことになるのである。これらの初期合作社の實狀、および歴史的意義と限界を實證的に考察してみたい。

秦漢時代の金・布帛・銅錢

山 田 勝 芳

前漢後期に貨幣經濟の衰退が始まるのか否かは秦漢時代全體の理解にも關わる重要問題であり、本発表はこれを中心問題とする。

秦は先進貨幣經濟の影響下にいわば受け身の形で貨幣經濟に入ったが、やがて國力強化を背景として兩銖制に基く半兩錢を發行し、同時に金と布をも貨幣とした。しかし獨自の規定の布制は金錢の増加によって行われなくなった。また銅錢發行以後、盜鑄を禁止し、かつ外國の貨幣流通による經濟の混亂を防ぐべく「通錢」という禁止規定を設けた。

漢初の方孔圓錢たる半兩錢への急激な轉換と文帝代の四銖半兩錢を経て、武帝代では、半兩錢を廢して五銖錢への急激な切り換えを行うために郡國にそれを發行させ、その後、溫存しておいた中央の錢銅を以て名目五錢の赤側五銖を鑄造して莫大な收入を得たが、次いでそれを廢し、三官五銖のみとした。五銖錢の鑄造總額二八〇億のうち、かなりの量がこの武帝代に鑄造されており、前漢後期の錢鑄造額は原料の制約もあって少なかった。

一方漢初豊富であった金は武帝代以降國外に流出する量が多く、銅錢不足と相俟って前漢後期には貨幣經濟の衰退が始まる。また布